グリム兄弟によって聞き取られ、まとめられたメルヒェンは、弟ヴィルヘルムによって、版を重ねる毎に１９世紀の時代観にあった表現に書き改められていく。それは、ビュルガー（Bürger – 富裕市民階級）の道徳観からであり、ゲルマンの言語表現法を復活させたいためでもあった。

⇒　ヴィルヘルムの好んだ修飾、キリスト教の影響の見える表現

１８１２年版

... wunderschöne Rapunzeln ...

「すばらしくきれいなラプンツェル」

... daß sie ganz abfiel und elend wurde.

「女房はすっかりやつれて、みじめな姿になってしまいました」

endlich aber ward die Frau guter Hoffnung

「それでもやっとのことで、女房が身ごもりました」

１８５７年版

... schönsten Rapunzel bepflanzt war; und sie sahen so frisch und grün aus, ...

「植えてあったみごとなラプンツェルは、新鮮な緑色をしていたので」

... daß sie keine davon bekommen konnte, so siel sie ganz ab, sah blaß und elend aus.

「女房はすっかりやつれて、青白く、みじめな様子になってしまいました」

endlich machte sich die Frau Hoffnung, der lieb Gott werde Ihren Wunsch erfüllen,

「それでもやっとのことで、女房にやさしい神様が望みをかなえてくださるような気配が現れました」